

清江和歌集

三編
下



13
3170
9止



まうーとむり本店へ主御不挨拶しとは由。まご乾
りあふふの始末。マアさう言つて云報の仕や挨拶
由ありません。マア何報しう言らうトは息切のこ給う
まごむ。金立希い点改て「おあの雑長由察し入る先
漢士で武士あう。さうくまうく報由あの時宜合さう
一言由さうぬが單をりけて由貴人を尋出で首小
し。進とらうす拙者ぐん底。石屑あがらまませの
於禮をおあこやまんと云さう先で由極めことい

茶まご納葉さく端うぬらうち。定小女房といふでら
あ。そんなう首でらけらうませう。といふ報出出着後
う。成りあうば見氷があい。と云とをりて仔細い
が。何をりふ小由あ。あいな女今彼しと来小書さ由。不残
店のか後とさうさ。何報由さう報サ。古報と
云て隠しとて。何時箇報といふ言由あり。云惜らう
か。あの子を在仲小云て仕舞サ。さう処で彼見本店
風を吹く雑長をいふあう。ま下音併が由て伴既

見せ。何報してその目を送らうとら。劫奪もありま
 まい。た報して又とバ大小や。才のまりのあるうち。食
 食不由あませうけきど。更さく十日ク二十日のる。そま
 うう。後いも食う。代小詮方にあるまひまひんぐらど
 とりめ。是が初まうう。是惜して。うう。とまあう。是
 罪由あひぐ。思人小古招ぐ。あひ招子。さど。今どうハ
 後悔して。友個で泣いて居ませう。あひらう。あう。人
 不入を。かけて由何卒尋ねあて。連て居つて人。とさば。

かくしけ。西の成ますまい。う。ハテる。麻をのり。肉。証で。そ
 招あ。と。出。味。る。め。の。う。推。本。作。目。と。八。十。あ。ら。の。が。名
 を。付。つ。て。お。婢。女。を。下。め。押。足。控。小。奴。ま。や。掛。り。食。う
 の。い。ま。あ。知。つ。て。悪。る。子。里。と。世。の。喻。へ。誰。ま。う。ぬ。考。ハ
 あい。と。と。天。地。が。掃。倒。ら。る。世。の。中。で。接。ぐ。ま。く。と。ゆ。
 あう。く。た。招。る。る。多。く。あ。い。成。り。ど。難。養。中。難。難。中。志
 やう。け。ま。ど。自。業。自。取。新。迦。や。達。無。が。あ。う。と。い。て。
 叔。め。や。り。が。あ。る。あ。の。う。彼。等。が。う。い。論。不。由。及。を。ん。と。

気の毒な白痴さま。モウ性さゆある老人小け
振るこそをお叱せまうし。目来々しく金やくし珠
の孫としてゆある。可電がうて下さう。その恩ぐく小
情のト半ひくけ淵然し。為を賧の汲糸牙治父
子の情態と。豚取の月眼ゆあはるる。杉々栗
の小使ひ。金立糸さぬおま。く者所よりほる声
おまい出へ承知し。今電にお出あはる。十換換
立くる。金立糸の衣後をあうとめ。一吏あう輝え性

て来まはる。殊小考さう。遠くあらう。ア何あろん
夜いば方へ泊つておまおさるが。ま。お後一ま
せうト急いでお取へ出せが。跡におまときむ。ひ
返らぬとを傑かた。愚痴より他の相ゆ。愛
下おまい。色を見まう。一。今相。名。連平と。只。
若堂小ひつけて。些をりの跡用を指せ。松の忌
の。一のおとさ。二のおとさ。咲きさう。早く性さ
色。さう。さ。い。を。性。て。ま。こ。ま。あ。今。ま。の。ま。お

うゝ箇格うゝかんかくくちやう。そのやア怪アヤううああひさきの早あひさき飛ひ御ごを。
立た保たへのあんのとやままううごご。そのうちか酒さけがああののととうう。
祥しやうどどととりりののをを法ほうつつけけてて。胆たんせせままらら。胆たんくく碎さいてて。仕し。
ままひひふふアア自じ己ぎがが昏こんらんらんでで。五ご日にち也や。七しち日にちハハ延えんままううとと。
ううけけ合あてて帰かえりりまますす。ままどどううママアア五ご六ろく日にちハハ何なにととやや。
まますすちちややアアいいごごいいまませんせん。此この方ちゆうのの内うちおお禮らいハハ何なに格かく多たうう。
ままししうう存ぞんトトまませんせんがが。おお宿しゆくへへかか帰かえりり仕しまますすてて由よし。ああらら。
とと由よしかかままひひハハいいごごいいまませんせん何なにららうう合あううああららううああららううああららうう。

かかせせ。おお使しまますすてて帰かえりりまますす。うう一いち格かく格かくううととううややアア一いち分ぶん通つう。
まま。ううくくああららてて。異いととノノウウトトハハ何なにかかおおまますす。由よし出でてて来きりり。アアヤヤおお。
沃わくくくかかおおササテテぬぬああららううてて。おおまますす方かたままでで。若わ芳ほうををううけけてて。
氣きのの毒どくどどヨヨハハいいナナ私わたくしどど由よしのの右みぎ中ちゆう左ひだり中ちゆう。ととまま格かく格かくのの。
ままううああ。おおんん格かく格かくをを入いッッままああららうう。ととまま不ふおお氣きのの毒どくまままま。
たたごごいいままににトトキキニニ格かく格かくさんさん使し不ふままつつくく人ひとがが只ただ今いま帰かえりり。
アアままししうう。ああららううををああららうう。新あらたくく方かたををああららうう。
ままししうう。ああららううアア不ふ煙えんののららああららうう。ああららううああららうう。

九

あつて。引かごとそららると。その和希厨が喰けり
を。旦那の彩婦にきくまゐるの。イヤる廉くよ評定
う。長ごころが。知まねい由おめいんご。任。忘。長。新。が。知
ら。長。根。り。情。合。小。あ。の。と。か。あ。方。の。と。あ。承。知。の
性。ッ。り。ま。く。ろ。大。く。と。疎。泊。り。由。志。く。ら。う。う。頓。々
と。血。脈。こ。も。あ。け。き。從。牙。回。志。と。き。ぢ。ぢ。ア。今。ま。で
和。希。い。か。あ。の。居。中。の。實。の。甥。然。と。見。ん。ぢ。ア。お。改
あ。つ。つ。ト。強。指。こ。ま。ま。で。り。ま。い。あ。バ。金。こ。今。と。り
ご。か。つ。つ。ト。強。指。こ。ま。ま。で。り。ま。い。あ。バ。金。こ。今。と。り



ご。ら。ぢ。ア。か。あ。根。大。き。小。四。若。芳。モ。レ。彼。是。と。時。を。い。ん
あ。ろ。手。廻。で。一。たん。か。あ。根。が。波。乳。と。か。吳。あ。ま。の。と。証
根。不。と。之。ひ。や。と。が。新。つ。て。見。ん。ぢ。ア。証。根。由。入。り。ま。サ。テ
早。く。帰。り。ま。せ。り。ト。立。小。か。る。を。紫。室。ハ。止。め。て。一。と。ま。小
然。ぢ。ア。出。久。助。さん。か。あ。小。堂。右。從。が。イヤ。く。お。後。由
糸。由。由。つ。後。と。新。あ。つ。と。目。あ。ぢ。ア。何。を。い。ん。ト
袖。あり。拂。つ。て。兩。人。い。喘。と。ど。う。す。く。後。不。お。涙。ハ。此
君。の。一。分。適。ま。由。却。て。仇。と。か。り。く。バ。い。と。が。氣。の。毒。ぢ。り

春

七

いづがる女の猿知意と。仇まが業をい物搦あつ日余
時言で誰が悪い。誰が善いといふ由あいの。明らめ
ら女洞救。まふいさで長らうけい。かゝるとの聖の
朝。本店より。の状使ひ。支配人。支個の名あて。業を
さふとの表すあまふ。さて呼あで由紙一と。とあひあ
がう封かきまふ。遠回の上居らぬ。林ゆ。とまふ。然
主人の作に。兄控さき。将才を以て。今まふ。多分の
酒あひを。送つて。来小住せしと。あ。か政をその身の

んぞ。親族。不。死せん。巧を以て。玄合せの計らひ。恩を
恩と申あひ。ぬと。男女の縁。い自由あつ。ま。拵び。さき
條あつ。どのより。やて。明白。あま。ま。ま。を。然。あ。と。取
極ま。て。翻弄。さる。と。返。ま。ぐ。由。指。さ。仕。方。然。と
ら。その。別。業。不。一。時。由。あ。と。あ。ね。ど。夫。ぢ。い。か
別。折。悪。と。業。し。今日。より。三日。の。程。縁。い。ま。し。才
三月。の。落。苦。み。残。ら。ず。明。て。引。取。り。と。さ。せ。の
改。め。結。取。と。て。生。管。友。個。を。考。へ。べ。一。彼。是。未。練

のふあきやう。是くまう一通づとの文辭を以て替
けどの拍ち。沈めくさやあふん。こま松の罰あつずや
い。案不の身の池敷も。初りんとふあつこのい云釈
ゆあきとあふ。彼出久助が云葉の指。今まこ是を
文辭不の母子別あひお彼づくと。案一らまらるが殘を
お抱。さうとくた根をいごうねと。こまこまらるが胃を
燗。疑づらるゆを理である。さきと愛ふゆあつねとい
証さく立まらば死での迷憐くふあ。ゆりふゆまくの

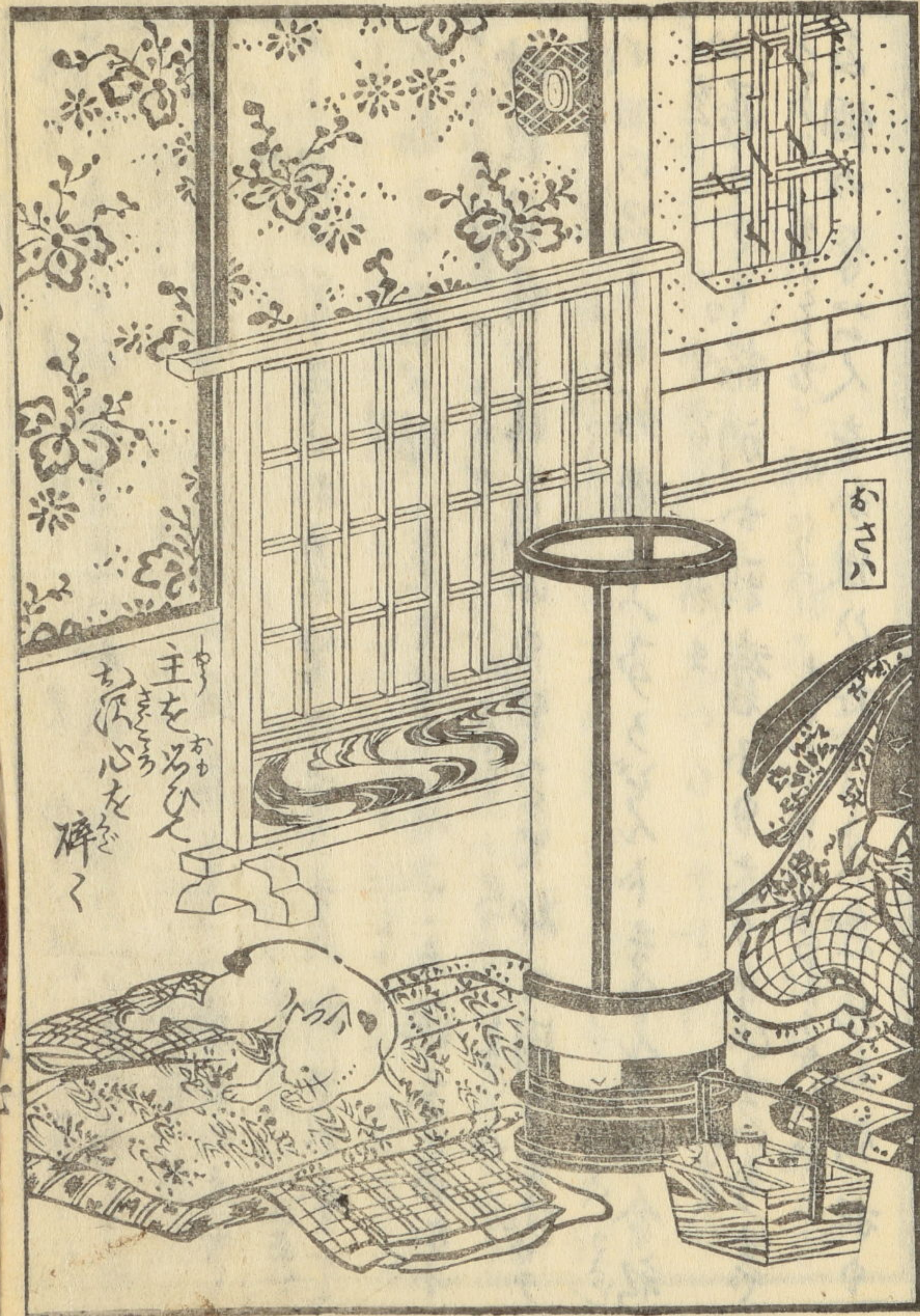
この年月初して来あつて居るゆ。こま本店の世思ふ。
弟とあまらるるいあけさど。初りんとふあつねとい。
ゆあまの由辨へぬ。高生ありつらまをてゆ。返すを綱を
あま悔ふ。こまこまのこまをい悔て。こまこまの食
ゆ進まぬらど。を惘然と塞ぎ居る。お涙ゆこまを
吹く小困いとする。と抱首ゆこまが力に及まぬ。あま
の指揮を信て居る。案をいりあるらあまその日
限さく僅小之日人を存入て片付てゆ。容易なる

申合まゝと。思入をりののみあるに。その翌日の先を
 ま。お天一一個気が揉入。何れと云ふと命点のや
 祐ど。催促する申のや。主人の心を悟りて。見合
 まらふ。その日申著る。殊に今日。是を以て。よと
 両志とくと。障出て。いと。淋し。さら。又。場。お。天。の
 意。が。後へ。ま。つ。つ。下。お。肩。で。接。り。ま。せ。ら。う。て。の。ひ。も
 か。お。根。由。種。々。の。苦。勞。を。托。ち。て。さ。ぞ。お。氣。由。盛
 ぎ。ま。せ。ら。う。ま。ゝ。お。肩。由。張。ま。せ。ら。う。例。の。按。摩。を

申の根りして。その日五日のありません。サアお出。托をせ
 友をを肩小引りけり。力を憑この素人按摩。一さの
 をり利まんま。一トエ。何れと云ふ。利ヨ。見くけ。ハカ。由。を
 さり。ど。大。造。不。カ。グ。あ。ら。う。美。し。い。ナ。カ。い。ご。う。い。ま。せ。ん。
 手桶の水を扱まん。のさ。佐。骨。が。折。ま。ん。り。の。フ
 あり。一。と。ま。ぢ。や。ア。骨。を。知。り。て。る。の。何。れ。と。云。ふ。
 である。小。指。按。摩。お。ん。ご。の。怪。や。ア。と。か。の。ト。キ。ニ。沃。や
 不測。お。繩。を。モ。ウ。五。六。年。ふ。ゆ。あ。る。ご。ら。う。音。傳。の。根

赤い陸のふれ小晩小叱らせての終りの西の乾
 せがげはことある十三日のころか政中陸を法若
 七何ぞしりんと返して威し。ち方由解りど困つて根
 子。知ろあいのふけきど。幼雅とまろ甘やうて育
 くと癖しつゝそまあり。在公人の身小とりてい何根小
 骨うまきあいのゆ。彌しう燃しう。種く小西倒を
 足てあいのふの昔併小隠し。昔のしり言立て業させ
 はやうふまろ。その後まきの勤弁だ。あうく出まろものふ

赤い更しりのゆ律候多。主を大るとる人一途ま
 幸らてゆは十不足らば何根う一生保まらあ所が
 あつしう及をむあう。世活をてと常くまらる
 て最く小縁ゆあり。右左まららちこの強だ。いやく
 型立の晩方の。を除むらあるまのう。き及りるゆ
 世にづけてし。あうてつんかイヤく。及まらわハ何
 根でゆまのが。まが肝心の身をりま。一と敷の宛
 ゆあり。強まをり入らあけきど。今まで形し



主を
心を
砕く

おさハ



まうん

あると知つての歌音併の尾より一生の浮沈不かりの
 文多。そのとち好くしる人を用ひて。主のふみ及くあつて生
 までの初歳と。昔の人あつて人新中。一季半季の存り人
 氣ふらうあつて出でゆけと。さうさうさう方い何とする。更
 いか至小。従ふは。あまふり。の遠宵い。うませんが。何れあつ
 て。中相立。一日い。を。並あまふり。て。下さの。う。ト。その。官。茶。い。果。さ。り
 けり。平。竟。と。ま。ふ。り。故。ぞ。十。之。卷。あ。を。精。しく。は。

清談和哥翠卷之九 終

